

建設経済委員会 行政視察調査報告書

- 1 視察日 2024年5月15日（水）～17日（金）
- 2 視察先 調査事項
○長野県長野市
・信州地域デザインセンターの取り組みについて
○長野県松本市
・松本市の観光施策について（松本観光ビジョン）
- 3 視察者
- | | | | | | |
|-------|---|---|---|-----|-----------|
| 委員 | 長 | 芹 | 澤 | 正 | 志 |
| 副委員 | 長 | 森 | 垣 | 康 | 平 |
| 委員 | | 清 | 水 | | 寛 |
| 委員 | | 前 | 田 | 敦 | 司 |
| 委員 | | 前 | 野 | 文 | 孝 |
| 委員 | | 村 | 岡 | 峰 | 男 |
| 委員 | | 義 | 本 | みどり | |
| 当 | 局 | 米 | 田 | 紀 | 子（観光文化部長） |
| 議会事務局 | | 山 | 本 | 雅 | 彦 |



信州地域デザインセンターの説明



長野県議会議場にて



松本市役所での説明



松本市役所前にて

日 時	2024 年 5 月 15 日（水） 午後 3 時 20 分～4 時 50 分
視 察 先	長野県長野市
調査項目	信州地域デザインセンター(UDC)の取り組みについて
調査内容	UDCは、行政都市計画や市民まちづくりの枠組みを超え、地域に係る各主体が連携し、都市デザインの専門家が客観的立場から携わる新たな形のまちづくり組織や拠点として、2024 年 4 月現在までに、全国 26 拠点（うち 2 拠点は活動終了）に展開し、千葉県柏市で最初のUDCができた時は、大学と連携したまちづくりが模索されるなか、北沢猛 東京大学教授（故人）による「公・民・学」が連携したまちづくり拠点設置の提案をされたことがきっかけ。長野県が2019年に設立した、公（長野県・UR都市機構）・民・学（東京大学・信州大学）が連携したまちづくりの支援組織。県が広域連携を進めようとした理由や経緯、UR都市機構や大学が関わるメリットや今後の課題を調査した。
所 感	長野県は 77 の市町村があり、市町村だけでは連携が困難なこともあり、まちづくりには限界があり、現長野県知事の阿部守一氏が横浜市副市長時代にUDC立ち上げに関わった経験があり、知事の強い思いで設立された。阿部守一氏の経歴を見ると、自治省(現総務省)出身で、ちょうど市町村合併の頃に長野県に副知事で県政に関わり、総務省に戻り過疎対策室長を務め退官している。これまで県の地域振興局で市町村の支援はしていたが、そこにも課題があり、市町村の相談しやすさを重視し、敢えて県庁舎を出て街中の古民家に設置した。 「市町村職員の機運を盛り上げる・地元を何とかしたい」という思いを尊重し、地元で開催する勉強会等には役職のある方をあえて呼ばず、現場に関わる若い人が意見を出しやすい工夫を徹底した。きっかけ作りに徹して支援を行っている。県職員だけではなくUR都市機構職員が関わっており、同じプロジェクトに関わる市町村が問題意識を共有、同じ方向、人を育てる等市町村の裏方に徹している。組織の目的は、つくるまでの支援であり、動き始めたが、維持が困難になったケースもあり、今後はどう維持していくのが課題。県が市町の調整役となり実施し成果を出している事業があるが、うまく動き出すと当然であるが県は手を引こうとする、県が手を引けば市町の負担は当然大きくなり、調整機能が働かず持続が困難になる。本市には、県民局が調整役となる事業もあり、更に、県立の芸術文化観光専門職大学ができ、但馬地域の中でも観光分野だけでなく、但馬管内の市町と様々な分野で活動が生まれている。地域の中では人口規模が大きい中心的な役割の本市は、本市が生き残るためにも、本市の利益だけではなく地域内のそれぞれの市町と様々な分野で実務者レベルの連携がますます必要であり、UDCの取り組みから県と市町との関係性を意識するたいへん有意義な視察であった。

日 時	2024 年 5 月 16 日（木） 午前 10 時 00 分～11 時 30 分
視 察 先	長野県松本市
調査項目	松本市の観光施策について
調査内容	長野県松本市の観光施策について、新型コロナの影響、インバウンド観光の現状と課題、松本観光ビジョン策定のプロセスと周知方法を調査した。
所 感	松本市は平成 17 年 4 月に合併し人口 23 万 5 千人、978 平方 km の範囲を有し、長野県で最も広い市となり、国宝である松本城に関連する観光促進だけではなく、「山岳・音楽・学問の都」として街づくりを推進する面もあるとの説明を受けた後、新型コロナの影響と観光ビジョンに関する説明を受ける。 まず新型コロナの影響だが、観光関連の目立ったものとして、公共交通の利用者が減少し、タクシー運転手・バス運転手の不足が激しく、コロナ以前と以後で大きく社会情勢が変化してしまったとの事。 原因となる公共交通の利用者減少に対し、利用促進するための施策として、バス停を駅直結にしたり、クレジットカードでの決済を可能にしたりするなど、利用しやすくするための施策を行っている。 他にも観光エリア周遊の為、シェアサイクルを市内に点在させ、民間へ業務を委託しているとの事。(1000 円／1 日利用可能) ただしこちらは、アプリケーションがヨーロッパのスマートフォンとの相性が悪く利用が伸び悩んでいるという事なので、同様の取り組みを行う際は注意が必要だと感じた。 また、宿泊事業者においても働き手不足も深刻となっており、その状況に対応すべく、長野県が宿泊業の人材確保業務の効率化業務を行い、松本市を經由し 10 か所程度の宿をモデルに働き方の実態調査と短時間の働き手確保を試験的に行っているとの事。さらには、小中学生向けに観光の勉強をしている点やインターンシップなども積極的に受け入れているという話も興味深い。 続いてインバウンド観光に関しては、コロナ以後も東アジア・東南アジア・欧米豪の方が同比率で来訪され、増加傾向にあり R5 は 23 万人を超えており、R5 年度の観光消費額では、国内の日帰り観光消費額が 7,400 円に対し、インバウンド旅行者は 16,500 円。宿泊に関しては国内の観光消費額が 3 万円に対し、外国人は 4 万 4 千円という数字が浮き彫りとなった。 これらインバウンド観光が伸びている一方、夏の時期は松本城への入場時の長蛇の列ができるなどオーバーツーリズムの課題も出ている。 それらの観光を取り巻く環境の大きな変化とともに旅行者の価値観や需要も変化していることを踏まえ、観光に携わる地域事業者、地域住民、観光関係団体等、全ての関係者間で目標を共有し、一体感を持って取り組むために、その指針となる新たな観光ビジョンを令和 6 年 3 月に策定された。 ビジョンを策定する観光資源ワークショップでは新たな観光資源が多く増加すると共に、観光課題も浮き彫りになり、その中からキーワードを 8 つ抽出し対応し、観光地像を言語化したビジョン、 「あなたと“いきたい”まち ～繋がる・触れる・彩る 松本～」がうまれた。 特に興味深い点はそのビジョンを中学生でも理解できるよう市民に対してプロモーションを行っている点だ。 様々な外的要因を受けながら変化する時代において、市の向かうべき方向性を市民と共に策定し、さらに市民にわかりやすく伝えていく。 この過程こそがまちづくりを推進していく上で最も大切な事だと感じる視察となった。